資料２

令和６年度における学力向上に向けた取組について
～全国学力・学習状況調査、とっとり学力・学習状況調査及び英検ＩＢＡの結果と対応について～

令和７年２月１４日
小中学校課

１　全国学力・学習状況調査の結果について（実施日：令和６年４月１８日）

①教科調査においては、小学校国語・算数は全国平均と同等であり、近年改善傾向にあるが、中学校国語・数学は、全国平均を下回り、近年下降傾向にある。特に中学校数学が課題であることから、全県の中学校・義務教育学校に対し数学訪問を実施し、県指導主事が授業を参観し、教師に直接授業づくりについて指導助言している。
②重点的に取り組んできた「思考・判断・表現」を問う問題及び「記述問題」で、全国平均には届かないものもあるが、正答率に改善の傾向が見られる。
③質問調査では、自己肯定感や地域への参画意識は高まってきており、各学校において、ふるさとキャリア教育が推進されていると考えられる。授業で自分の考えを工夫して発表することについては全国平均を下回り、課題がある。授業改善の方向性を示した小冊子「鳥取県教育の重点」の活用を促し、継続して授業改善を推進していく。

（１）調査概要

①参加者　小・義務教育学校第６学年児童…約４，３００人
　　　　　中学校第３学年・義務教育学校第９学年生徒…約４，２００人
②調査項目　国語、算数・数学、児童生徒質問調査（アンケート）

（２）結果の概要

＜各教科＞

教科調査平均正答率（％）

	国語		算数･数学	
	本県（公立）	全国（公立）	本県（公立）	全国（公立）
小学校6年	６８　→	６７．７	６３　→	６３．４
中学校3年	５７　↓	５８．１	５０　↓	５２．５

※文部科学省は、平成２９年度より小数点以下を四捨五入し整数値で公表している。
※本県は±１％以内は「全国平均と差はみられない」として取り扱っている。

「思考・判断・表現」を問う問題の全国平均との差

学校・教科	R４	R５	R６
小学校国語	−2.0 →	+0.1 →	+0.2 ⇧
小学校算数	−1.6 →	−1.4 →	−1.6 ⇩
中学校国語	−1.1 →	−1.6 →	−1.9 ⇩
中学校数学	−1.4 →	−2.6 →	−2.0 ⇧

記述問題の全国平均との差

学校・教科	R４	R５	R６
小学校国語	−0.5 →	+1.7 →	+2.9 ⇧
小学校算数	−0.4 →	−1.1 →	−0.5 ⇧
中学校国語	−1.6 →	−1.0 →	−1.4 ⇩
中学校数学	−1.4 →	−2.6 →	−2.0 ⇧

＜質問調査＞

○県独自調査のとっとり学力・学習状況調査と全国学力・学習状況調査からわかる教育データを関連付けて分析するなど、活用が進みつつある。
○コミュニティ・スクール等の取組の充実により、学校と地域や保護者との連携が深まっている。
▲自分の考えを工夫して表現することに関しては引き続き課題が見られ、継続した取組が必要である。
▲授業における一人一台端末の活用は急速に進んでいるが、その活用方法についてはさらなる工夫が必要である。

【成果と課題】

○小学校において、算数の全校訪問や活用問題集「B-PLAN」、「単元到達度評価問題」の活用、調査官等を招聘した研修を行うことで、育成を目指す資質・能力を明確にした授業づくりについて継続して一貫したメッセージを伝えてきた結果、思考力、判断力、表現力等の育成をポイントとした授業改善に取り組む学校が増え、正答率に成果が見られた。
▲中学校数学において、生徒質問調査の「数学の授業がよくわかりますか」の問いで全国平均を大きく下回り、「知識・技能」を問う基本的な問題の正答率が低いことから、生徒がわかる・できる授業の実践が不十分であると考えられる。

【今後の取組】

・市町村教育委員会と連携し、支援を必要とする学校に対して県指導主事等が学校を訪問して一緒に授業づくりについて取り組むなど重点的な支援を行う。
・子どもたちが課題解決に向けて自ら判断し自分の考えを表現していく力を付けるため、教育課程を工夫した学校づくりや主体的に学ぶことができる授業づくり等、新しい学びを実現する取組を推進する。また、次世代リーダーとして本県教育を牽引する人材を育成するため、１週間の県外の先進地への派遣等を実施する。
・中学校数学訪問を全県で実施し、県指導主事が直接授業を参観し、授業づくりについて指導助言する。

２　とっとり学力・学習状況調査の結果について（実施日：令和６年５月１５日から６月６日までの間）

【小学校】
・国語・算数ともに、概ね順調に学力レベルを伸ばしている。
・４年生時に学力に課題があった現６年生は順調に学力レベルを伸ばし、例年並みの学力レベルになった。
【中学校】
・国語・数学ともに、概ね順調に学力レベルを伸ばしている。
・特に現１年生、２年生は、国語、数学とも学力レベルの伸びが大きい。
①学力向上検討会議で教育データを基にした学力向上施策の検討を軸に、学校への継続的な指導助言、管理職を対象にした学校マネジメント研修会の開催、大学等との共同研究等を実施し、とっとり学力・学習状況調査等の調査結果の分析を生かした教育施策を進めていく。
②また、児童生徒が主体的に学ぶ授業づくりを推進し、主体的・対話的で深い学びの実現を目指すとともに、学習方略や非認知能力等の向上を図り、学力向上につなげる。

（１）調査の概要
①参加者（参加市町村：１４市町村）
小・義務教育学校第４・５・６学年児童…１２，７００人
中学校第１・２・３学年、義務教育学校第７・８・９学年生徒…１１，９３３人
②調査項目　国語、算数・数学、質問紙（アンケート）

（２）結果の概要
【状況】
ア－①　現学年別学力レベルの推移（学力レベルは、1C から 12A までの 36 段階）
※（　）内は、前年度からの学力レベルの伸び

	国語				算数・数学			
学年	R3	R4	R5	R6	R3	R4	R5	R6
現 小 ４				6-C				4-A
現 小 ５	-	-	6-C	6-A (+2)	-	-	5-C	5-B (+1)
現 小 ６	-	5-A	7-C (+4)	7-B (+1)	-	5-C	6-C (+3)	6-A (+2)
現 中 １	6-A	6-A (0)	7-B (+2)	8-C (+2)	5-B	6-C (+2)	6-B (+1)	7-C (+2)
現 中 ２	6-A (+2)	7-B (+2)	7-A (+1)	8-B (+2)	6-C (+3)	6-A (+2)	7-C (+1)	8-C (+3)
現 中 ３	7-B (+1)	7-A (+1)	8-B (+2)	8-A (+1)	7-C (+4)	7-A (+2)	8-C (+1)	8-B (+1)

ア－②　各学年の学力が伸びた児童生徒の割合（%）
※（　）内の数値は、昨年度の児童生徒の調査結果

	国語	算数・数学
小 ５	72.6 (87.7) ↓	62.7 (70.8) ↓
小 ６	64.5 (78.9) ↓	72.1 (64.4) ↑
中 １	71.6 (65.4) ↑	68.5 (60.2) ↑
中 ２	64.8 (66.8) ↓	72.7 (61.8) ↑
中 ３	64.8 (55.8) ↑	56.2 (68.1) ↓

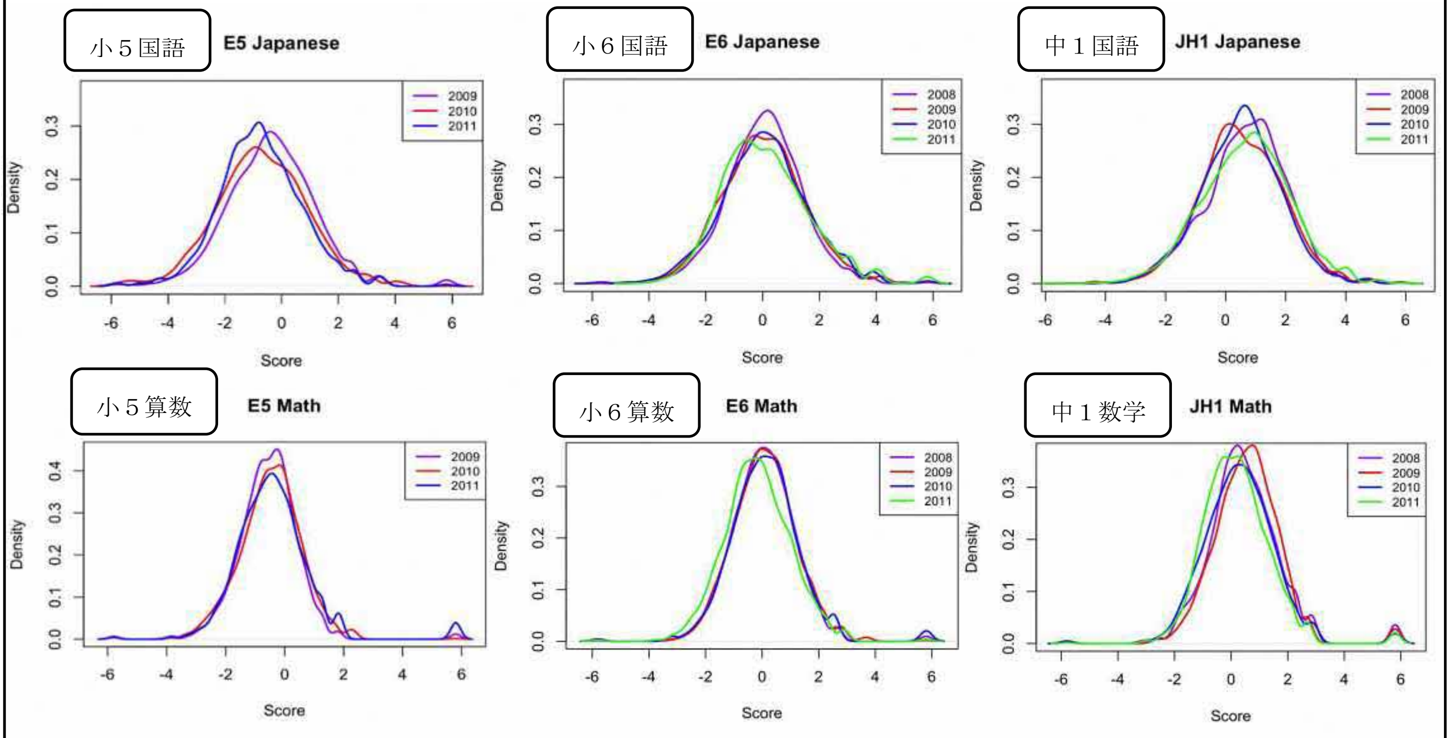
イ　児童生徒質問紙調査（５が最高値）※（　）内の数値は、昨年度の該当学年の調査結果

学年	主体的・対話的で深い学びの実施	学習方略				
		柔軟的方略	プランニング方略	作業方略	認知的方略	努力調整方略
小 ４	3.8 (3.7) ↑	3.4 (3.4) ―	3.5 (3.5) ―	3.5 (3.4) ↑	3.8 (3.7) ↑	3.9 (3.9) ―
小 ５	3.7 (3.7) ―	3.4 (3.4) ―	3.5 (3.5) ―	3.4 (3.4) ―	3.7 (3.7) ―	3.9 (3.9) ―
小 ６	3.7 (3.7) ―	3.4 (3.4) ―	3.5 (3.5) ―	3.3 (3.3) ―	3.8 (3.8) ―	3.8 (3.9) ↓
中 １	3.8 (3.7) ↑	3.4 (3.5) ↓	3.6 (3.5) ↑	3.5 (3.5) ―	3.8 (3.8) ―	3.8 (3.9) ↓
中 ２	3.7 (3.7) ―	3.3 (3.4) ↓	3.4 (3.5) ↓	3.4 (3.5) ↓	3.6 (3.7) ↓	3.6 (3.7) ↓
中 ３	3.6 (3.7) ↓	3.4 (3.5) ↓	3.5 (3.5) ―	3.5 (3.5) ―	3.7 (3.7) ―	3.6 (3.6) ―

学年	非認知能力				
	自己効力感	やりぬく力	向社会性	勤勉性	自制心
小　4	3.5	―	2.7	―	―
小　5	3.4（3.6）↓	―	―	―	3.7（3.7）―
小　6	3.4（3.4）―	3.1（3.1）―	―	―	―
中　1	3.3（3.4）↓	―	2.9（2.9）―	―	―
中　2	3.1（3.3）↓	―	―	3.3(3.3)―	―
中　3	3.1（3.1）―	―	―	―	3.7（3.7）―

◆主な学習方略・非認知能力について
・柔軟的方略：自分の状況に合わせて学習方略を柔軟に変更していく活動
・プランニング方略：計画的に学習に取り組む活動
・作業方略：ノートに書く、声を出すといった「作業」を中心に学習を進める活動
・認知的方略：より自分の理解度を深めるような学習活動
・努力調整方略：「苦手」などの感情をコントロールして学習への意欲を高める活動
・自己効力感：自分はそれが実行できるという期待や自信
・向社会性　他人や他の人々の集団を助けようとしたり、人々のためになることをしようとしたりする力
・勤勉性：やるべきことをきちんとやることができる力
・自制心：自分の意思で感情や欲望をコントロールすることができる力
・やり抜く力：自分の目標に向かって粘り強く情報をもって成し遂げられる力

ウ　各学年の各教科における学力層の推移（上段が国語、下段が算数・数学）



（※Score：学力値　　Density：割合　　2009～2011：生まれ年度（2011は、現中１））

【今年度の調査結果からわかること】

○全学年が学力レベルを１から３上げることができている。現中学２年生の学力が伸びた生徒の割合や伸びの大きさが他の学年と大きく変わらないことから、今年度の調査では、小中学校間の接続による顕著な学力の問題は見られない。

○国語の学力層の分布については、小学校、中学校ともに年度ごとの差はあまり見られない。また、学力の伸びも順調に見られ、中学校１年生においては、伸びが大きい年もある。

▲主体的・対話的で深い学びについて、概ねどの学年でも実施できているものの、昨年度と比較するとあまり変化が見られない。主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を図る取組を進める必要がある。

▲自己効力感は、学年が上がるにつれて低下する傾向が見られる。発達段階によるものとも捉えられるが、自己効力感は学力の伸びと関係することから、自己効力感を高めていく取組を進める必要がある。

▲算数・数学においては、毎年の伸びは見られるものの、近年小学校６年生以上で下位層が増える傾向にある。

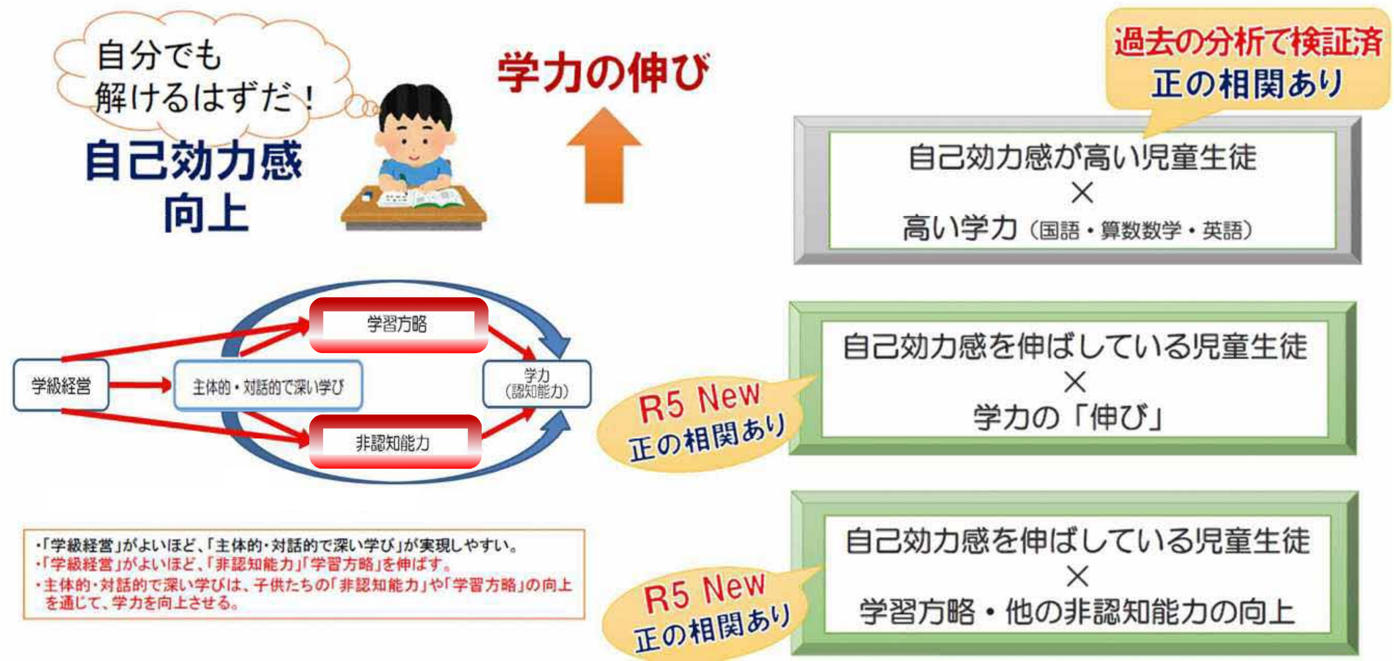
【とっとり学力・学習状況調査の分析から得られた知見】

非認知能力・学習方略について、調査の分析結果より、以下の知見が得られている。

① 学力の向上には非認知能力、学習方略が強く関係している。

②学力を維持向上できている児童生徒は、学力が伸び悩んでいる児童生徒と比べ、早い段階から非認知能力や学習方略が高い傾向にある。

③自己効力感を伸ばしている児童生徒は、学力も伸ばしており、学習方略や他の非認知能力も伸ばしている。



現在実施している総務省とのとっとり学力・学習状況調査のパネルデータを活用した共同研究（「令和６年度 IRT・パネルデータを用いた自治体横断的分析に係る調査研究」においても、非認知能力と学力との関係について分析している。今後も学力を伸ばすために、日々の授業改善とともに非認知能力や学習方略を高めていくことが必要である。

【今後の取組について】

①今回の調査結果を全国学力・学習状況調査とも関連付けながら、次年度の事業計画を立て、良い実践を広く周知するとともに支援が必要な学校に対して適切に対応できるよう検討する。

②児童生徒が主体的に学ぶ授業づくりを推進し、主体的・対話的で深い学びの実現をめざすとともに、学習方略や非認知能力等の向上を図る。

③鳥取県では独自に、とっとり学力・学習状況調査で年に１度測定している非認知能力、学習方略を、各学校がいつでも何度でも調査し、児童生徒一人一人の変化を見取ることができる非認知能力等調査アプリ「見え～る」を開発し、今月（令和７年２月）に各学校に配布予定。このアプリを活用して、目に見えない一人一人の非認知能力等の変化を調査・分析し、日々のわかる・できる授業改善とともに、非認知能力、学習方略の伸びに着目した学力の向上の取組も推進していきたい。

３　英語力向上事業（４技能型英検ＩＢＡ）の結果について（実施日：令和６年６月 10 日から７月 26 日までの間）

リーディング・リスニングのテストでは５１％の生徒が、ライティング・スピーキングのテストでは５４％の生徒が、英検３級（※２）レベルに達している。技能別では、リスニング及びスピーキングの平均ＣＳＥスコア（※３）は英検３級レベルを上回り、その他の技能の平均ＣＳＥスコアも英検３級に近くなっている。また、昨年度２年生次と比較すると、リーディングは１８ポイント、リスニングについては４０ポイント上昇し、着実に力を伸ばしている。

※１　４技能型英検ＩＢＡ（Institution Based Assessment）：　日本英語検定協会(以下「英検協会」)が実施する、英語力を、読むこと（リーディング）、聞くこと（リスニング）、書くこと（ライティング）、話すこと（スピーキング）の４技能で測ることができるテスト。結果は、技能別のスコアや英検級レベル等で示されるが、実際の英検資格の取得とはならない。

※２　英検３級：国が示す中学卒業段階での英語力の指標（CEFR A1）の例として示される外部試験資格の１つ
国の第４期教育振興基本計画では、生徒の英語力について、中学校卒業段階で CEFR A1 レベル相当（英検３級程度）以上を達成した生徒の割合を令和９年度までに６割以上にすることを目標とするとともに、全ての都道府県・政令指定都市において、同指標を達成した生徒の割合を５割以上にすることを目指すことが示されている。

※３　ＣＳＥスコア（Common Scale for English ）：英検協会によって作成された、英語力を示す尺度
技能（リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング）別に表記することで、技能ごとでの英語力を把握することが可能。また、継続的に活用することで、技能ごとでの英語力の伸長度を把握することが可能。

（１）調査の概要

①参加者　　中学校第３学年・義務教育学校第９学年生徒（以下、「中学校３年生」）
「リーディング・リスニング」４，００２人、「ライティング・スピーキング」４，０１０人

②調査項目　「リーディング・リスニング」「ライティング・スピーキング」

（２）技能別の結果等

※（　）内は、令和５年度の値

技能	平均ＣＳＥスコア	英検３級レベル以上の割合	出題分野別傾向等
リーディング	３６５．６ （３６８．４）	５１％ （４７）	「会話文の空所補充」の正答率が昨年度よりも向上している。昨年度に引き続き、「長文読解」に課題がある。
リスニング	３６７．５ （３５５．２）		昨年度課題が見られた「パッセージの内容理解」の問題の正答率が向上している。
ライティング	３６４．１ （３４５．２）	５４％ （５５）	平均正答率は「内容」が最も高く、「文法」が最も低い。質問に対して適切な内容を書くことができず０点となった生徒の割合が７％であり、昨年度（１３％）から６％減少した。
スピーキング	３５３．２ （３４９．４）		「自分についてやり取りをする」問題の正答率が最も高い。昨年度に引き続き、初見の英文を音読することに課題がある。

（参考）ＣＳＥスコアによる、英検合格レベル判定基準

	準１級	２級	準２級	３級	４級	５級
４技能総合	２３０４	１９８０	１７２８	**１４５６**		
リーディング	５９８	５１１	４４８	**３７９**	３３０	２３６
リスニング	６０３	５０３	４３０	**３４９**	２９２	１８３
ライティング	５９１	５０６	４４４	**３７５**		
スピーキング	５１２	４６０	４０６	**３５３**		

（３）成果と課題

○昨年度の中学校３年生と比較すると、リスニング、ライティング、スピーキングの平均ＣＳＥスコアが昨年度を上回った。特にライティングについては、大きく上回るとともに、無得点の生徒の割合が昨年度（１３％）から６％減少した。各学校で「書くこと」の指導の改善が図られたと考えられる。

○本年度の受験者について、中学校２年生時（Ｒ５）と比較すると、特にリスニングの伸びが大きかったことから、教師が英語で授業を行ったり、教師と生徒、生徒同士の英語でやり取りを行ったりする場面が増えたことで、生徒が英語を聞くことに慣れ、リスニング力を伸ばすことにつながったと考えられる。

▲昨年度に引き続き、リーディングの長文読解とスピーキングの音読の正答率が低い。「読むこと」については、一語一語や一文一文の理解や内容の正誤の確認にとどまる等、目的や場面、状況等に応じた読み方を身に付けられる指導が十分になされていないことが考えられる。

（４）今後の取組

生徒の英語力について、英検ＩＢＡの結果を基に、経年での伸びや過年度との比較等で把握できる「英検ＩＢＡ結果シート」を作成し、令和６年１１月に周知を図った。各学校で、本シートを活用して指導改善を図るとともに、生徒が自分自身の伸びや課題を把握し、自己の学習改善に生かす取組が推進されるよう、学校訪問や研修会等で引き続き周知を図る。

また、本試験結果から各学校の生徒の英語力を技能別で把握、分析し、学校訪問や授業研究会等で指導助言を行うことで、各学校での授業改善を個別に支援する。

４　令和７年度取組について

「社会の創り手の育成」「ウェルビーイングの向上」

令和５年に策定された国の教育振興基本計画の大きなコンセプトは、「持続可能な社会の創り手の育成」「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」である。鳥取県においても、予測が困難な時代に自らが社会の創り手となり、持続可能な社会を維持・発展させていく人材を育成することや、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるよう、教育を通じてウェルビーイングの向上を図るため、鳥取県教育の重点目標を「自分の考えを持ち、工夫して表現する子どもの育成」と設定し、全県を挙げて学力向上に取り組む。

主体的な学び

「主体的な学び」とは、子どもたちが学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる力を育むことを指す。

主体的な学びを促進することは、子どもたちが自ら考え、判断し、行動する力を育成し、将来の社会で活躍するための基盤を築く上で非常に重要であり、鳥取県として学力向上事業の中心に据えて取り組んでいく。そのため、各学校において子どもたちが主体的に学ぶ授業づくりが推進するように県教育委員会が伴走的な支援を行う。

授業力の向上

鳥取県では、全国学力・学習状況調査の結果分析から、鳥取県の子どもたちは、知識や技能については身に付いてはいるものの、その知識を活用することに課題があることが明らかになっている。そのため、学習指導要領が示す３つの資質・能力のうち「思考力、判断力、表現力等」に注力して事業を展開してきている。児童生徒の「思考力、判断力、表現力等」の向上を図るため、教師の指導力向上を目指して以下の事業を行っている。今年度の調査結果からも、その効果が見えつつあることから令和７年度も継続して実施する。

（１）活用力を意識した授業づくり

全国学力・学習状況調査の調査問題を活用し、児童生徒が知識を活用する力を身に付ける授業の実践

・英語４技能統合型の授業改善推進に係る研修会、中学校定期考査研修会等の実施

・中学校数学・英語について県指導主事が県内全中学校を訪問して授業を参観し、指導助言

（２）子どもが伸びる授業づくり

教師と児童生徒が単元で付けたい資質・能力を共有し、子どもが主体的に学習する授業を展開

・「鳥取県教育の重点」の周知・徹底

自ら学ぶ力の育成

学力向上に向けて、教師の指導力の向上を図ると同時に、子どもが自ら学ぶ力の育成することが重要である。教わる授業から、「子どもが学び取る」「子どもが学び方を学ぶ」授業（探究的な学びや自由進度学習等）へと転換を図る。子どもが主体的に学ぶためには、一斉授業から、個の興味関心や学習ペースに応じて、個別最適な授業に取り組むことが効果的である。本県の小学校は来年度全学年３０人学級となるが、個別最適な授業づくりは、鳥取県独自の少人数学級の強みを最大限に生かすことに繋がる。そのため、自由進度学習等児童生徒の「主体的な学び」にチャレンジする学校に対して重点的に支援し、学力向上の好事例を全県に広める。

（１）子どもが主体的に学ぶ学校づくり事業

子どもたちが自ら課題を発見し、他者と協働しながら課題解決に向けて主体的に学ぶ力を育成する授業づくりを推進するため、自由進度学習などの様々な取組にチャレンジする学校を支援する。

（対象となる取組）自由進度学習、教科担任制、チーム担任制　等

（支援内容）・講師派遣　・県外先進校視察　・大学教授による授業改善の効果測定　・連絡協議会開催

（２）生成AI等を活用した英語力向上事業

国事業を活用し、中学校及び高等学校において実践校を指定して、英作文の添削や教材作成等の授業づくりに生成AI等を活用できる英語教師（AI英語活用リーダー）を育成するとともに、生徒にも英会話や英作文等に生成AI等を活用させることで、生徒の英語力向上と主体的に英語学習に取り組む態度の育成を図る。

・生徒・教師への生成AI等アカウント配布

・生成AI等を活用した授業づくり研修会講師派遣

・県外先進校視察及び協議会の開催

＜これらの取組を推進し、学校を支援するため、以下の事業を継続して実施する＞

（１）学力向上検討会議

外部有識者と連携し、教育データをもとにした学力向上に係る事業評価を行うとともに、教育データの効果的な活用の好事例を共有し、今後の事業検討を行う。

（２）教育データ活用事業

・県独自のとっとり学力・学習状況調査を実施し、調査のデータを根拠とした教育施策の立案に向け大学等と共同して教育データを複合的に分析することで個別最適な授業づくりを支援するとともに、管理職に向けた研修会（学校マネジメント研修会）を実施する。

・児童生徒の英語４技能向上のため、外部試験（英検IBA）を実施し結果の分析等を行う。

（３）指導力等向上事業

・教員向けに指導力向上に向けた各種研修会を実施する。

（４）個別最適化に係る教育ＤＸ推進事業

・県内公立小中学校の全生徒を対象に、オンライン英会話レッスン（対人型、AI活用）やeラーニング教材を活用する市町村を支援する。

鳥取県学力向上戦略図

未来を担う子どもたちのウェルビーイングのために

社会の創り手の育成　**ウェルビーイングの向上**

【重点目標】自分の考えを持ち、工夫して表現する子どもの育成

見える学力
主に、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」

資質・能力の三つの柱をバランスよく育成

見えない学力
主に、「学びに向かう力、人間性等」

授業の質の向上

誰一人取り残さない授業づくり

活用力を意識した授業づくり

全国学力・学習状況調査を活用し、児童生徒が知識を活用する力を身に付ける授業の実践

B-PLAN　単元到達度評価問題

子どもが伸びる授業づくり

児童生徒と単元で付けたい資質・能力を共有し、単元のゴールを意識した学習活動を実施

子どもが伸びる授業づくりプロジェクト

児童生徒が自分の考えを持ち、表現する場を設定

「鳥取県教育の重点」の周知・徹底

主体的な学び

- 学ぶ意欲の向上
- 自己調整力
- 粘り強さ
- 学ぶ意義の実感
- 基礎学力の定着

自ら学ぶ力の育成

児童生徒が学びとる
児童生徒が学び方を学ぶ

探究的な学びの充実

児童生徒が自ら見出した問題を他者と協働しながら解決する「探究的な学習」の充実

プロジェクト型学習（PBL）

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実

例えば、進度や内容など個別最適な学習活動等を実践し、児童生徒の可能性を最大限に引き出す学習を展開。児童生徒が自ら学び方や学習ペースを選択して主体的に学習を進める。

次世代の学び創造プロジェクト

生成AI等最新技術の活用　自由進度学習

ＩＣＴの効果的な活用　　教育データ（とっとり学力・学習状況調査等各種調査）の活用